
一年越しの想い

伊之口浩作

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

一年越しの想い

【コード】

N8850A

【作者名】

伊之口浩作

【あらすじ】

俺は一年前に仲良くなった人が好きだった。その時から、ずっと。今もだ。

(前書き)

半分勢いで書いた小説です。あまりやった事のない試みなので、上手くいった気はしません。読んで貰えれば幸いです。

一年越しの想い

彼女との出会いは一年半前だった。新しいクラスで出会った。

最初は席が近いつてだけで、あまり気にはしてなかったけど、ある時彼女の方から話しかけてきてくれた。

「ねえ。堀井クンで陸上だよな？」

きっかけとは些細な物で、その時の俺はその場限りの質問だろうとたかをくくっていた。だけど、彼女はそんなつもりでは無かった。

「あたしテニス部なんだけど、知ってる？」

「見たことあるけど、全然知らない」

「え〜？ ウソだ〜」

それからというもの、俺と彼女は次第に仲良くなって行った。彼女は俺に対して積極的で、何から何まで聞いてきた。俺はあまり口数が多い方じゃないけど、彼女の質問には必要最低限以上の答えをした。

ある日の事だった。彼女はまたいつもの様に、俺に話しかけてきて来た。

「ねえ、堀井クンで好きな人いるの？」

俺は答えに窮した。普段なら即答し、もっと別の話題を振ったりするのだが、この時ばかりは答えられなかった。

当時、俺には彼女以外の人が好きだった。ただ、その人については名前以外全然知らないという感じだったし、第一、自分の意中の人を他人に教えるのには、多かれ少なかれかなりの抵抗があったのだ。

俺が苦笑いそのまま固まっていると、彼女からいくつかの選択肢が出された。

「何組のコ？ 前のクラスで一緒だった？ カワイイ？」

とりあえず場の雰囲気乱したくなかった俺は、示された選択肢に応じる形で答えていく。そしていつの間にか、その人の名を言っ

てしまっていた。

「へえー、二組の武田さんかあ」

「ああ。だけど、名前以外は全然知らなくて」

「じゃあ、メアド聞きに行きなよ！」

正直な所、かなり驚いた。名前以外知らない人に対して、いきなりそんな事が出来る訳ないだろう。

だが、彼女は立て続けに俺の背中を押してくる。

「じゃあ、あたしが聞いて来てあげようか？」

「いいって。そこまでしなくても」

「じゃあ、聞きに行きなよ」

もう何が何だか。

「待って。じゃあさ、まず最初に前原さんのメアド教えてよ」

自分でも何を言ったのかわからない。ただ、場を打開したかった一心で、そう言ってしまったのは覚えている。

「分かった。じゃあさ、武田さんにもそんな感じで聞きに行けばいいじゃん。ガンバ」

もしかしたら、俺はこの時既に、彼女の事を武田さん以上に気になっていたのかも知れない。

それに、向こうも俺に対してまんざらじゃないのかも知れなかった。地味で目立たない事が特長みたいな俺だ。そんな俺にここまで構ってくるって事は、ひよっとして

だけど、二人に溝が生まれ始めたのは、そのすぐ後からだだった。

多分、いや、絶対、俺はこの時彼女が好きだった。何故なら、家に帰ったら瞬間からメールを送ったからだ。次の日も、その次の日も。

俺はまだこの時、自分の馬鹿さ加減を知らなかった。いくら仲が良いと言っても、毎日の様にメールが来たら、流石に嫌われる。

ある日を境に、彼女は俺の事を忘れたかのように空々しくなってしまうった。

俺は完全に嫌われた。ウザがられた。後々先輩に聞いたのだが、「用もないのにメールするからだ」と言われた。

本当に俺は、大馬鹿者だったんだ。

それからしばらくして、武田さんにアドレスを聞いた。だが、彼女は俺に、

「今、メールしたい気分じゃないから」

と言い残し、俺に背中を向け行ってしまった。

それからずっと、俺と彼女の間には溝が出来たままだ。

一時期、

「下の名前で呼ぶ？」

とか、

「カラオケでさ、『瞳を閉じて』歌ってよ」

とまで来た仲だった。

だが、そんな関係も、俺の愚行によってあっさりと崩れ去ってしまったのだった。

一年後、つまり今。運は急に向いた。体育祭の応援ダンスで、あろう事かペアになったのだ。

俺は正直言つて凄く嬉しかった。何故なら、今も彼女を好きだったからだ。ただ、一年間心の奥にしまっていた想いが果たして本当なのか、という疑問があった。

俺の気持ちは本当なのか？

一年前の想いを信じて良いのか？

まだ、好きなのか？

答えはおのずと出た。ペアだという事が分かってから数日後、ペアでの練習があったのだ。練習の最中、何度か彼女と目が合う

確信した。

好きだ。

それからというものの、俺の最大の関心事はそれだ。何をするにしても、彼女の事が頭をよぎる。笑った顔、俺の名前を呼ぶ声。ちょっと垂れ目な感じや、短目な髪が凄くキュートで可愛い。想えば想う度、どんどん好きになっていく。彼女が練習に顔を出すと、俺はとても嬉しい。一緒に練習すれことあれば、尚更だ。

好き。生まれて初めて、真剣に人を好きになった気がする。最近、やたら鏡を見る様になったし、風呂の時間も長くなっている。好かれない一心で、練習の時もやけに張り切ってしまう。

流石に一年も経てば、向こうも俺に対する嫌悪の情も薄れているだろう。きっと今回ばかりは、上手くいきそうな気がする。

だから俺は、自分の背中を自分で押すんだ。視界の真ん中には彼女がいて

「ずっと、好きだった」

二人の溝。今回ばかりは縮まるはずだ。

(後書き)

読んで頂きありがとうございました。

一年越しの想い

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8850a/>

一年越しの想い

2009年2月23日17時01分発行